

(株)黒滝農園
代表取締役

PICK UP

THE PERSON

黒滝 彰

KEY WORD

魅力

— miryoku —



「農業は自然との闘い。計算通りにいかないこともありますが、最後に結果を出すことができれば、それで努力は報われます」と黒滝社長。
高齢化や後継者不足が原因で衰退傾向にある農業だが、大変なことばかりではなく、大きな魅力を有する仕事だと語る。
社長が本心からそう思っていることは、その生き生きとした表情からも窺える。
長男の尚矢氏も、楽しそうに仕事をする父親の姿を見て、「自分も農業に携わってみたい」とこの仕事に従事するようになった。
法人化を果たした今後は、より多くの若者に農業の魅力を伝えていく構えだ。

「農業は大変なことばかりではない。
その魅力を、若い世代に伝えていきたい」



黒滝社長の奥様・真希子さんと交えて記念撮影



黒滝 尚矢



代表取締役
黒滝 彰

「家業」から「企業」へ！ スタッフの待遇面を高め 幸せに働ける農業を

青森県つがる市稲垣町で農業を営む「黒滝農園」。70ヘクタール以上にも及ぶ広大な農地を有し、米や大豆、花、にんにくなどを生産している。農家としては二代目になる黒滝社長は父親が築いた基盤を守りつつ、さらに事業を拡大し、法人化も果たした。本日は新山千春さんが同農園を訪れ、社長とご子息の尚矢氏にお話を伺った。

――黒滝社長のお家では代々農業を営んでこられたのでしょうか。

(彰) はい。代々農家の家系です。私の父が9人兄弟の7男だったので、独立する時に本家から3ヘクタールの農地を譲り受け、農業をはじめました。以来、冬場の収穫などもしながら、少しずつ農地を大きくしてきました。

――社長も子どものころから家業のお手伝いをして？

(彰) ええ。小学生のころから、田植えや収穫などの繁忙期は手伝っていましたね。けれども学業修了後は、一度東京で就職したんです。

――そうでしたか。その時はどのような関係のお仕事をされていたのでしょうか。

(彰) 大手電機メーカー関連の企業で、ものづくりに携わりました。しかし、色々考えて、やっぱり実家の農業を継ぐほうが良いかなと思いい、2年ほど勤務した後に退社してこちらに戻ってきました。

――そこから両親と一緒に仕事をされるようになったんです。

――色々なことにチャレンジしてこられたんですね。

(彰) 私は好奇心が旺盛で、何にでも挑戦してみたいタイプなんです。放っておいたらどんどん暴走してしましますが、そこにストップをかけるのが妻の役割(笑)。妻がいてくれるから、心おきなく挑戦することが出来るのだと思います。

――最強のパートナーですね！ご子息の尚矢さんはそんな両親の姿をご覧になってこられて、この道に進もうと思われたのでしょうか。

(尚) はい。両親を見てみると楽しそうだったので、自分もやってみたくてという気持ちになりました。実際には、農業をやると言っていましたね。実際にこの仕事に就いてみるとつらい場面もありますが、それでも「楽しい」という気持ちのほうが強いですし、自分も楽しみながらやっていければと思っています。

――小学生のころの思いは、中学、高校と成長されるにつれて変わることになったのでしょうか。

(尚) ええ。農家といえば作業服のイメージがあるでしょう。けれども父は普通のカジュアルな服装で仕事をしていたので、おしゃれに興味が出てくる中学・高校時代は自由な服装で仕事ができるところに魅力を感じていました。

(彰) 忙しいので、仕事の合間に役場に行くこともあり、わざわざ着替えるのが面倒だったんですよ(笑)。普通の服装なら、いつでも気軽に掛けられますからね。

――けれども、確かに会社勤めよりも自由

――こちらでは何を栽培されているのでしょうか。

(彰) そうです。当時は田んぼが6ヘクタールぐらいになっていたので、働き手は両親しかいませんでしたから。それで私が家業に入り、結婚してからは妻も含めた4人で仕事をするようになりました。妻も地元出身で、実家は農家なので抵抗はなかったようですね。

――こちらでは何を栽培されているのでしょうか。

(彰) 米をメインに、大豆や花、にんにくの生産などを行っています。米だけではなく、新しいことにも挑戦してみたいという思いが常々あり、ある時はトマトの生産に着手したこともあったんです。結局トマトは田んぼが忙しい時期と重なるため断念したのですが、色々作物を検討する中で、周りの方から花の生産はどうかと勧められ、米づくりの傍ら、花の生産をはじめました。カサブランカやスターチス、トルコキキョウなど様々な種類を育てています。さらに息子の尚矢の提案でにんにくの生産

です。ね。服装も決められますし、音楽をかけて作業してもいいです。

(彰) ええ。若い人にも、そういうところで注目してほしいと思っています。農業という苦勞の連続のようなイメージをお持ちの方も多いと思いますが、そこから変えていけば農業に携わる人も増えていくのではないかと考えています。もちろん自然相手の仕事ですから苦勞もありますし、決して楽な仕事ではありません。けれどもその中で収穫でき、結果を出せれば、苦勞も大きな喜びに変わります。そこが農業の楽しいところですね。

――苦勞があるからこそ、喜びも大きいのでしょね。では最後にこれからの展望をお聞かせ下さい。

(尚) この辺りの農家も高齢化が進んでいるので、後継者がいないという農地を預かり、若い世代で引き継いでいければと思っています。ただし1人では限界があるので、同世代の仲間と一緒に取り組んでいければ良いですね。

(彰) これからは若い人が中心になっていくので、新しいことを導入していきたいですね。たとえばスマホで農地を図面化してチームで管理し作業の共有・効率化を図ったり、積極的に機械化を進めていったりしたいと思っています。また、法人組織にしたのは、農家も一般企業と同じように社会保険や厚生年金に加入し、給与や休日、勤務時間など、福利厚生と待遇面をしっかりと整えていきたいという思いがあったからです。現在、従業員は2名で、繁忙期は6〜7名という小さな規模ですが、一歩ずつでも家業から企業へと転換させていきたいですね。

つがるにんにくと、にんにく加工品が好調！

▼「黒滝農園」でにんにくの生産をはじめたのは、黒滝社長のご子息・尚矢氏の言葉がきっかけだった。「冬場につくるものがなかったので、何かやらなければという話の中で、にんにくを手掛けてみたいと提案したんです。私は農家としてはまだまだ未熟ですが、それでも両親は話を聞いてくれますし、やってみようと言ってくれたので嬉しかったですね」と尚矢氏。にんにくの生産は好調で、今では農園の大きな柱だ。

▼また、現在にはにんにく加工品の生産にも力を入れている。自社の米で作った糶とにんにくを使用した「にんにく塩糶」がそれだ。2013年につがる市商工会が募集した「青森・食彩つがる新名物コンテスト」で、社長の奥様・真希子さんが考案したにんにく塩糶スープが最優秀賞を受賞。それを機に商工会や県、市の支援を受けて商品化されたのだという。「にんにく塩糶」はまるやかなにんにく風味の万能調味料で、地元の物産館や道の駅で販売されている他、インターネットでも購入することができる。是非ともお試しあれ！



●ゲストインタビュアー
新山千春
(タレント)

「黒滝社長と奥様の真希子さん、ご子息の尚矢さん、皆さんがとても楽しそうに農業のことをお話されているのが印象的でした。きっと私たちには分からないような苦勞もあるかと思いますが、そんな苦勞さえも楽しんでいらっしゃるご様子で、とても素敵なお家だと思いましたね。今後はより多くの従業員さんたちにも『楽しい農業』を伝え、ますます事業を守り立てていって下さい！」